

子どもに與へる神話について

文部省圖書監修官 石 森 延 男

日がたつにしたがつて、人の記憶は、ぼんやりとしてくるものです。その中であつて、色もあせるので、それだけが、消えずに残つてゐるものがあります。

それは、たゞの記憶といふものより、お話の種子のやうになつて、そこから、芽が出て來たり、つるが伸びたり、花が咲いたり、風にゆれたりしてきます。

私の記憶の糸をたぐつてみてもやはり、さうです。大きいものになればなるほど、記憶の種子をとりまく光や、彩や、溫度が、ほのほのとして、思ひ出すだに愉しい世界であります。

自分の家に流れてゐる一條の空氣がその中に生きてゐることを感じます。また、自分の幼な顔がどこかに現はれてゐるやうにも思はれます。その思ひ出を、自分では、心から懐しいものと考へてゐても、ほかの人には、かならずしも、さほど懐しい愉しいものとは、考へられません。

これは、人一人の場合についてのことを、話してみただけですが、一國の神話などについてもこのやうなことがいはれるものでせうか。

日本には、日本の神話があります。若々しい日本の面影がその神話のあちこちに現はれてゐるやうに思ひますし、その時代の一條の氣風といふものが、流れ／＼と、今の世にも傳はつてゐるやうにも思はれます。

このことは、歴史といふものと結びつくといふ意味ではありません。「歴史」の出發を意味することでもありません。日本の神話に對する一種の懐しさと愉しさを味はへるのは、やはり日本人だけではないかと思ふのです。よその國の人々にはそれほどの意味の深いものではなからうし、それほど身近かに感ぜられるものでもないと思ふのです。

今まで「神話」はゆがめられて、子どもの世界に與へられてきました。ゆがめられてといふのは、神話、本來のおもしろさ、無邪氣さ、美しさ、愉しさ、大いさ——などが第二義的に考へて、神話が歴史的事實であるかの如き錯覺をもつて、子どもに與へられたことにあるのです。

そこで子どもは、一つの疑ひにつきあたつてきました。事實といふものと、物語といふものとの混線が、小さな頭の中

で起つてしまひました。この混線は、容易にとけるものではありませんでした。したがつて、この混線から初められた「日本歴史」は、理解することはむづかしいものでしたし、身についた感得はできませんでした。

そこに、「日本歴史」教育の益息があつたにちがひありません。「神話」をもつて、何かのために利用しようとした過去の歩み方によつて、神話自身も傷められましたし、「歴史」の姿も汚されてゐました。

神話によらず、何によらず、何かのためにしようとして、そのものを利用することはおもしろいものではありません。

學校では、ただいまのところは、歴史教授で「日本神話」を取扱ふことはいたしません。これは、再び今までのやうな誤つた道を子どもに與へないためであります。

妙な國家主義者たちの楯にされたり、獨善的な國家觀のお先棒にしたり——そんなをかきなものに利用されるには、日本神話はあまりに文學的存在ではありませんか。

學校では、「日本歴史」はとりあつかひませんが、家庭で、子どもたちに聞かせてやることは、少しもさしつかへありません。さしつかへないどころか、こんな美しい明るいものがありは、他國神話と同様に、その子ども達の想像力を豊かにし、生活を和げ、心を愉しませることが出来ます。

「日本神話」は神話として、そのままの形で、そのままのあ方で、すなほに、お話してやるのが大切なことです。原形に近い表現で、淡々と與へてやることが望ましいことなのです。語り手がかつてに解釋をしだり、裝飾をしたり、比喩をつけたりする、かへつて、この神話獨特の風格は損ぜられてゆくのであります。

これは、ちよつと話がそれますけれども、たとへば、インツブ物語にしてもさうです。あの原形ともいふべきものは、韻律を含んだ極めて簡單な、お話です。簡單にするために韻律といふ道を通つたのではないかとさへ思はれますのに、これを後世のいはゆる話家たちが、冗舌にまかせて、尾ひれをつけて、話をしたために、いろいろとゆがめられたものが少くありません。あれなども、できるだけ簡單に子どもたちの前に示してやりたいと思ひます。これと同様に、神話の場合でも、その發生された形に近い姿で、わかりやすい言葉で、ぼつりぼつりと與へてやるのが肝要です。

この短い、客觀的な存在が、いい種子となつて、幼な子の心といふ沃土に芽を出すのです。外から與へられた芽ではなく、自分自身の沃土に育つた芽は、逞しくて愛らしいものであります。

さらにして、「文學的眞實」といふところに神話を位置づけるならば、在來のやうな混線は起るわけはありません。歴史的事實を學ぶに當惑するやうなおそれはありません。

神話のあの大きな動き、人間的な神々の様子——そんなことから日本人自身が、日本の國の古い古き思ひ出に愛着を感じることが出来るでせう。ほんたうに親しむ氣持になれるで

せう。

いたづらに、みそきをして、かしはでを拍つてたてまつるばかりが能ではありません。神聖視するといふことと、親愛の念をいだくことが、決して撞着するものではなく、また矛盾するものではありません。

ところが、神話を解く人たちにはつきりと考へていただかねばならぬことです。

小さな、一點ですが、ここが迷つてゐますといつまでも迷ひがとけません。小さい一點が、ずんずん大きくなつて、今度のやうなこの大きな國としてのつまづきにまで、立ちいたつたのであります。小事などといつて、うそぶいてゐると、何事によらず、後ではひどいめにあふことは、しみん／＼思ひ知つたわけですから二度とくりかへしたくはありません。

「天皇」の神格化といふ問題も、直接ここに根を有してゐることに思ひあたるでせう。眞に「天皇」を親愛したてまつる國民の至情が、さまざまな、神聖觀から神秘觀、道義觀など毒せられて、かくの如きはめにまで陥らざるを得なかつた過去のことは、深く念頭におくべきであります。

身にもつとも近きは、神であり、もつとも親しきは神であることを思へば、神話がいかにその國民の血を意味してゐるかもうなづかれるでせう。

「うなはの白兔」のお話などは、いつの世にも、空想的で、しかも現實的で、好箇の童話文學作品と思はれます、また人情味の濃い情景が描かれてゐると思ひます。

「海幸山幸」などは、現代劇としても意味の深い場面が綴られてゐるではありませんか。やまたの大蛇」にしても、「天の岩屋」にしても、子供たちには、十分驚異的な物語であつて、つねに新鮮であります。

かゝる興の深い、日本の思ひ出話を、ヴェールを着せることなく、直ちに今日の、この終戦後まるもないこのごろの子どもたちに、とつくりと話してやることは、無意味なことではありますまい。

小問答「とんでもない」

『民主主義教育では、一切叱るといふことは無いのですか。』

『とんでもない。』

『やつぱりありますか。』

『ほんとうの自由の生活では、自分で自分を叱るんでせう。その、自分で自分を叱る力のまだ弱い子どもには、傍からその力を手傳つてやらなければなりませんね。』

『それはそうですが。』

『それが、つまり、叱るといふことでしよう。』

『こわい目をして。』

『ハ、ハ、自然にこわい目になりましたよ。子どもの方から見て、その位でなくちゃあ、力の手傳ひになりません。』

『なんだか非民主的のようですね。』

『どうして。』

『個の獨立を妨げますもの。』

『妨げるんじゃない。助けるんですよ。』